

五月芝居見物講話

川尻清潭

〈出典：「演芸画報」昭和6年5月号〉

紅葉狩の初演は明治二十年十月の新富座で記録によると今昔物語にヒントを得たとしてあり、又古くは翫雀歌右衛門と歌山仲十郎とがやった事があってそれに拠ったという説もあるが、其外能楽の紅葉狩を取入れて出発したものと思われる。右に就て有名な話ではあるが、この紅葉狩を河竹黙阿弥翁（当時七十二歳）が書いた時、先代守田勘弥の許へ行き本読みをした処、守田がいうには誠によく出来た。然し姫の舞の間が、ちと物足らぬように思われますがといったら、左様、私もそう存じましたので、準備して参りましたと懐中から別に認めた歌詞を取出した。守田もいつもながら行届いた翁の用意に敬服したが翁は更に団十郎の処へ行って本を読んだら、団十郎も亦大層結構ですが、舞の条がもう少し欲しいといった。それではこれをと予備の分を出したので、イヤこれなら丁度いいと喜んだということ、期せずして団十郎と守田と同じ事を言ったのであり、黙阿弥翁も亦それを予知して先ず短かい方を示し、不足ならこれをと出したのは三人が三人とも符節を合したような同意見、流石舞台を知った人である一つの佳話になっている。而してこの時の一番目が『三府五港写幻燈』という名題で、当時の大事件だったノルマントン号沈没の場面などがあり、提灯胴の仕掛で汽船沈没の状を見せたのが評判で今でいえば現代劇とも称すべきハイカラの散切劇だったから、一そう此中幕が引立った訳で、当時は菊五郎が居ず、団十郎と左団次、芝翫等の一座だったが、この紅葉狩の振付に就てはその頃各座の振付を引受けていた先代花柳壽輔と、団十郎との間に何か感情の衝突があり、今の幸四郎の父、先代藤間勘右衛門に振りをつけさせようとの義もあったが、俳優は何も振付に付けて貰うばかりが能ではない、俳優自身でつけられると云う証拠を見せようと、結局団十郎自身がつける事になったのである。何しろ常磐津、竹本、長唄と、流儀三派を使い、即ち三方掛合であるからその頃珍しい大浄瑠璃に相違なく、先ず七世岸沢式佐の常磐津が最初に作曲され、次に三世杵屋正次郎節付の長唄が出来上り、それから鶴沢安太郎の竹本が完成したというような順序、常磐津の作曲中に、黄ばむさくらの葉もちればが歌いにくいという式佐の注意で、樹々の梢と直した等の挿話もある。さてこれへ団十郎が振をつけたのであるが、更科姫実は戸隠山の鬼女これが中心人物である事はいう迄もなく、前述の如く姫の舞いがそれではちと短かくはないかと云った程ゆえ、先ずこの舞を重要な見せ場とした度かた事は推察に難くなく、それだけこの舞には多大の苦心を払ってある。先ず楽太鼓を打おろして「敷島の三つの景色を歌人が」から始まり、塗骨の扇の振りがあって、次に二本扇と次第に進み「山路は苔の滑らかに」で維茂の方をじっと見込み、気をかえて両の手の指を組合せてそれを逆に前へ反り返えす「紅葉色ます村時雨」の振りになる条など、踊どころとして考えられてある。それから二本扇の中で「都に多く通天の」では、手に持った扇を高く投げ、何間かの間を膝詰めの小走りに下手へ走って受け止めるのだが、その

間に投げた扇は上手から下手へ恰かも橋の如く虹の如き美事な曲線を描いて受け止められるその鮮やかさは、団十郎没後いろいろな優が紅葉狩を演るが到底及ぶところでは無い。又『秋の山路に日の入りて』では舞台中央から前方へ投げた扇が、入目の形ちを意味してクルクルと舞戻って手元へ帰るといような手を見せたもので、斯ういうと何か曲芸じみるが、踊りに扇がつきものである以上、その扱いは斯く迄あるべきものだという。尚団十郎は少年時代から母親にやかましくその稽古を仕込まれたものなので、其頃私の父が団十郎を巖負にして茶屋へ招こうとすると、弟子が只今稽古中で御座いますからといつも断るので、段々様子を聞くと全たく彼は寸閑のない程あらゆる稽古をして帰宅するが、更に夜に入ってまで踊りの稽古を続けさせ、殊に扇のとりかたは燈火を消して暗中でやるのだという事が判ったそう。されば同優は少年の中からその修行を積み、充分なる信念をもっていた処から、斯くは初めて自分が振つけをするに当って、心ゆくばかり扇の扱いを取入れたものと思われる。斯くて維茂の寝入るのを見届け、手にもった扇を強く握り返しつつ詰め寄って行く凄味、侍女達が『維茂様には、まどろみ給ふか』というのを『こうれ』と鬼女の調子で制し侍女の方を振り返り見て、幕の中へ早足に入る条、これが近頃は特に荒々しく足踏みをして入る優があるが、団十郎は殊更に男になるのではなく勢いを見せて早足に入ると言う行方であった。

ところで斯うした所作事である以上、登場人物の悉くに踊りがあるのだから、当然維茂にも振りがあって然るべきだが、一寸腰元からむばかりで、あとはこれという振りのないのは、恐らく初演が左団次だったので特にそうしたのではないかと推測される。その代り山神の方は、踊りの名人たる先代芝翫が初演当時の役だったから、これには非常に苦勞したい手がついて居り、最初の掛りに八ひら手と云って神道家の団十郎が毎朝自宅で神拝をする時の手振りがその儘もり込んであったり『土拍子どうとふみ鳴らし』にお神樂が入っていたり、誠に幾度見ても見飽かぬ面白い振である。書下しの芝翫は山神を老人でやったから、着付も、茶紬の狩衣に、白の幣束が模様となっていたが、その後今の六代目が丑之助時代、この山神を子役で勤める事になったので、顔も略式の火炎隈に彩り、着付の狩衣も白地へ五色で幣束をつけ、踊りには格別変りもないが、引込みを派手にするよう花道付際で見得をさせ、ツケも打たせたのである。然しこれは子役の場合を考慮してやった事であって、本来は神さまなのだから、見得にもツケを打たせず、足音のツケもないのが正しいのである。それを大人がしても、ツケを打つようになったは、本の工風のある所を知らぬので故人の意志を失い乱れて終ったものなのである。それからこの引込みの前に酔潰れている従者二人を起すところ、一人は仰向いて眠り、一人は下手を向いて横になっている。その仰向いている方をまたいで、一人を揺起すと、寝返りを打つので山神は、酒臭いという心で袖をふる等、細かに巧みな手順がついているのだが、これも近頃は段々寝方の違ったのを見るようになって居る、しかし今回は凝り性の六代目が出て居る事で、すべてを本格に見せて呉れるであろう事を楽しみにして居る。

登場人物を万遍なく動かす為、侍女にも野菊の振りがあり、又二人の従者に迄も振りが

ついで、一つを木曾のかけ橋といい、今一つが按摩の踊りである。よく出来ているのは木曾のかけ橋の方で「見ればこわさに、こわさに見れば」など有名なもの、書下しには升蔵と鶴蔵とが従者だったが、升蔵は団門中でも踊の上手だったから、これを軽妙に踊りこなし、山神の振と共に舞踊好きにもてはやされたもので、後に他の曲へこれを盗んで振つけしたのも数々ある位である。升蔵という優はお神楽にも通じていて、自分から振りを工風し、勸進帳と紅葉狩とお神楽で拵え上げ、神田の錦輝館で同優を始め、雷蔵、鰻鮎六などで公演した事さえあった。然し勸進帳は宗家の十八番物だけにこれをお神楽化した事に就てはお叱りを受けたらしくスグおやめにしたが、紅葉狩のお神楽などは面白いものだった。思い出した儘付記して置く。

団十郎の更科姫は、最初の出に『客人暫時待ち給へ』を自分で云ったが、此頃は侍女に呼び止めさせるようになった。これは姫へ位をつける為めであろう。ところで姫の鬘はふき輪に花櫛を使うが、一度梅幸が下げ髪でした事がある。これは後ジテの鬼女で振る手と照応させた趣向であろうが、外の優は皆ふき輪である。そして初演の扮装は、いつもの赤姫だが、模様は流れに尾長鳥と紅葉を縫いにして、これが例となったが、近頃は違ったものも見受けるようになった。後ジテは金地に黒糸で、渦巻の雲をみす縫いにしたものをを用いる。維茂は書下しの左団次が烏帽子に萌黄の狩衣、夢さめには曲録から手を落してはつと驚き、自分で烏帽子をはね退け、袖のつゆを絞って襷にかけ、刀を小脇にかい込んで上手へ入った。その後歌舞伎座で五代目菊五郎が維茂をやった時は、薄紫地に花の丸の狩衣に、備前蝶の袴という、余りに左団次とは違った然も書髻までを廃した優美さ綺麗さに看客を驚かしたもので、余吾將軍という処から若さと気品とを見せた同優の工風だった。而して五代目は夢さめでは烏帽子を取らず、その儘先ず下手へ走って行って探すがないので、そこで袖のつゆを絞って襷にかけ、刀を前へ斜めに構えて一ついい形の見得をする。それから上手へ入るといふ順であった。斯くて二度目の出に、髪が乱れた鬘と替え、烏帽子をぬいで出たのだが、足袋は脱がずにはいた儘だった。左団次のように素足の方が勇氣は見えていいのだが、これは対手役の団十郎が『寺島に足袋をぬがせると、又白粉を塗り直すだろうから、手間がかかって可けないというので斯うしたのだ』という楽屋話もある。さて立廻りになって中央の松の木へ鬼女がかけ上る。この時鬼女を追って松の木の後ろへ廻った五代目の維茂は、スグと続いて出ずに暫時松の木の後ろで待っていた。そして団十郎の鬼女が松へ上り切ってから、始めて出て来て松を見上げ、片手に刀を持ってお約束の見得になる。つまり鬼女の上る迄待ってやったので、対手役のやり好いようにやり好いようにと考える名優の心遣いであった。然し左団次の維茂の立廻りは実に勇氣があつて立派なもので、キリキリ廻ってギバに落ちる処など、誰よりも鮮やかだったのは、流石立廻りを得意とした名優の値打ちを見せて居た。

次手ながら舞台装置に就て、いつも中央の松の立木、あれは御覧の通り曲った枝のことゆえ、これを支える腕木がついているが、何うも鬼女の出ようというような戸隠の山奥へ植木屋も入りはしまいに松の木の突支棒があるなどは不自然だと、詮索家の批難もあるの

で、今度のは兎に角あの腕木を使わない事に詭を出して置いたが、まだ本稿執筆中には何んなものが出来たか見られない。それに初演の時は正面の背景にアオリを用い、最初は美しい紅葉の山の書割が、後には紅葉を黒く描いたものになり、凄味を出したもので、更に一層の凄味をつけるには何うしたらいいかと団十郎が門弟たちに工風させたところ、雷蔵が考えて団十郎宅の庭から落葉を拾い集めて来て、これを舞台の松の梢へ乗せて置いたもので、立廻りの最中にも自然に落葉が舞台へ散り、最後に鬼女が松へ上って片手を枝へかけ、これを持上げて見得をする時などは一そう烈しくばらばらと降って来て、頗る凄さを添えたところから、団十郎が巧い考えだと大そう喜んでほめたという話が残って居る。尚、この時簀の子から鬼女の身体へ電気の光線を当てたので、鬼女から後光がさしたと大評判をしたものである。恐らく光線照明の最初だったろう。

鬼女が幕切れに火を吹く仕掛、これは当時痛天齋正一という奇術師が寄席で火食の術をやっていた。火のついた綿を平気で食べ、後に息を吹くと火の粉が口から出る。この秘伝を聞いたら、朴の木を焼いて粉にしたものを用いると具合がいいとあった。然し団十郎は更に工風して懐炉灰を用い、これを金物の管へ詰め、煙草で栓をして口へくわえ、吹出すと粉が火炎に見えた。勿論これも今日では、精巧な仕掛け物が出来ているこという迄もない。先ず此の位のところで……。